
Double Steppe

鉄氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Double Steppe

【Nコード】

N5486V

【作者名】

鉄氷

【あらすじ】

列車で帰るは懐かしい生まれ育った町

1話 駅（梓side）（前書き）

けいおん！のゆいあず支援小説となっています

1話 駅（梓side）

時々ガタンと揺れる体、ハッと目が覚めると明るい車内
眩しくてつい目を細めてしまう

そういえば家に帰るところだったっけ・・・

まだ目的の駅までは遠い、今は何時なのだろう

記憶の中では最後に見たのが4時半だったはず

携帯電話の右上には小さく5時と映し出されていた

5分も寝ていたにも関わらずまだ列車は進む

いつまでも続く長い線路は私の生まれ育った町へと進む・・・

ようやく駅に着き席を立つ

10分近くも座っているとお尻が平たくなってしまった

外に出るとまだ冷たい3月の空気がおいしかった

2話 再開 1 - 2

駅から出ると薄明るい空に明るく光った星、まだ5時だというのに3月の空は暗い

指は冷たいし寒い、暖かい物が食べたいと思い近くにコンビニがなにか記憶を整理してみる

確かこの道をまっすぐ行けば・・・あつたあつた

店に入ると懐かしいおでんの香りが漂っていた

どうしようか、お昼は食べてきたからそんなに食べれないし・・・

そんな時ふと雑誌売り場に目をやった

数人が本棚に向かい本を読んだり選んだりしていた

綺麗な黒髪の人・・・ってあれ？どっかで見たことがあるような・・・

・

しばらく見つめていると左側の若干茶髪の人に喋りかけている

その若干茶髪の人にも見覚えがある

すると黒髪の人がこちらを見つめてくる

慌てて目を逸らすも記憶の中に一人、該当する人がいた・・・

漣「梓？」

梓「ほえ？」

漣「おい律、あそこにいるの梓じゃないか？」

律「え？」

こつちをまじまじと見てくる茶髪の人、この人にも見覚えはあつた

律「梓じゃん！」

梓「律先輩、漣先輩お久しぶりです」

漣「久しぶりだな」

梓「はい、しばらく連絡入れられなくてすみません」

律「何してたんだよ？」

梓「ちよつと仕事が忙しくてですね・・・」

律「嘘つけ、どうせ彼氏といちゃいちゃやってたんだろー？」

梓「やってませんよ！痛いです」

律先輩の拳が私の頭の上でにぐりぐりと回されている

漣「律、梓が嫌がってんだろ」

律「ごめんごめん、で何か用事でもあったのか？随分仕事の鞆とか持ってきてるけど」

梓「いえいえ、でもたまには戻ってきたくてこっちでしばらく仕事しようかと、こっちの方が落ち着きますし」

律「じゃあしばらくこっちに居ると？」

梓「はい」

律「じゃああいつを呼ばないとな」

梓「誰です？」

私の疑問を他所に携帯電話を取りだしダイヤルする律先輩

漣「梓が都会に行つてから誰が一番唸つてたと思う？」

梓「・・・唯先輩・・・」

律「もしもしー」

「いやいきなりで悪いんだけど時間作れない？」

「いやいや大丈夫だつて」

「わかつた、じゃあ後で」

漣「なんて言つてた？」

律「家まで来てくれたとよ」

梓「今から行くんですか？」

律「善は急げ！」

漣「なんでお前がテンション高いんだ」

コンビ二を出て唯先輩の家へと向かう

久々に歩く道と町並みは妙に新鮮だった

律「着いたぞ」

周りを見渡すうちにあつという間に唯先輩の家目の前にある唯先輩の家だけは懐かしく思えた

3話 再開2-2

律先輩に手招きされドアに寄る

ドアチャイムを押す律先輩、その時私は少し緊張していたのかもしれない

しばらくしてドタドタと廊下を歩く足音、それが唯先輩なのか憂なのかはたまた両親なのかは理解できない

以前律先輩が漣先輩の足音だけで当ててみたことを得意げに自慢していたけれど改めて業の難しさが分かったような気がした

ガチャリとドアが開き誰かが出てくる気配

憂「梓ちゃん!？」

どうやら声の持ち主は憂のようだ

梓「久しぶりー、ごめんね突然着ちやったりして」

憂「うん、大丈夫だけど・・・あ、律さん漣さん、もしかしてお姉ちゃんと約束とかしてます？」

律「唯の奴まだ着替えてなかったりするかもな」

漣「いやそれはさすがに・・・」

憂「お姉ちゃん、律さんと漣さんと梓ちゃんが来てるから早く着替えなよー」

唯「え？あずにゃん!？」

何処か遠くで聞こえる声は確かに唯先輩の声そのものだった

梓「着替えてなかったんですね・・・」

律「ほらみるー」

またしばらくして廊下を歩くつというよりもかけてくる足音さっきの音よりも数倍早かった

唯「あーずにゃーん」

出てくるや否やさつそく抱きつかれてしまう

しかも以前より増して強いので苦しい

梓「苦しいです・・・」

先ほどの方に漣先輩に目で助けを求めてみるが見事にスルー

解放されたときは少し火照っていて暖かった

唯「あずにゃん仕事やめちゃったの？」

梓「そんなわけないです、少し息抜きに地元で仕事しようかなと」

唯「そつかー、あずにゃん頑張り屋さんだもんね」

漣「今から何するんだ？今から食べに行くとか晩食べなくなるぞ」

律「それを今から考えるんだー」

唯「じゃあ私の家で食べていけない？みんなと一緒にご飯食べるの久しぶりだし」

律「それじゃ決定！」

漣「おい律、いきなりすぎじゃないか？」

憂「私は今からお使いに行くので全然いいですけど」

漣「本当に食べていくのか？」

律「あ、そういえば漣はダイエット中か」

漣「甘い物とかカロリー高い物は控えてるし」

律「じゃあ漣ちゅわんはお家でママのおいしいーいご飯を食べておいてくださいね」

ガツンッ

鈍い音がして律先輩が頭を押さえる

律「いつてー！」

漣「誰も食べないとは言っていないだろ、それに今日ママ映画見に行っちゃったし・・・」

律・唯・梓「ママ？」

漣「おおおお母さん！律が変なこと言わせるからだろ！」

どうやら日常茶万事のようで安心

憂「ではお使いに行ってくるので中でゆっくりしてってください」

律・漣・梓「お邪魔します」

唯「いらつしゃい、座って？」

リビングは少し模様替えをしており机の位置などが多少ずれていたそれでもみんないつもの通りにお尻を置いていた

4話 会話1-2

憂が買い物へ行ってしまったって現在4人のリビング

軽音部は5人だったはずなのに一人足りない

そうムギ先輩がいないのだ

いつもぼわわんとしたあの人がいないだけでかなり場の空気が違う

梓「そういえばムギ先輩はどうしたんですか？」

漣「最近仕事忙しらしいんだ」

仕事が忙しい・・・ムギ先輩の場合店の一つ二つ動かしてそうなの

が少し怖い

唯「大変そうだね」

律「そう言う唯は何か仕事しないのか？」

唯「そついうのよくわからなくて・・・」エヘヘー

漣「おいおい」

梓「えへへーじゃないですよ、もう唯先輩も大人なんだしもう少し

自立しないと」

唯「あずにゃんはいつでも厳しいですなあ」

律「梓の言う通りだぞ、後輩も仕事してるんだし」

梓「そういえば律先輩ってどんな仕事をしてるんですか？」

律「飲食店で食べ物運んでる、漣と一緒に」

梓「漣先輩も一緒なんですか」

律「人の接客とか漣苦手そうなのになあ」

漣「まあ厨房の方にいるからそんなに気にはならないけど」

律「そんな梓は何やってるんだ？」

梓「私は両親のバンドを継いでやったりバイトでやりくりしてます」

唯「あずにゃん現役なんだ！」

梓「そうですね、それで今日両親に会いに来たって感じですよ、しば

らくライブも休みですし」

唯「最近ギー太ひいてないなあ」

律「私もドラム叩いてないし」

漣「ちよつと気分変えるためにやる程度だなあ」

唯「みんな忙しいもんね」

漣「またやりたいな、みんなで」

梓「そうですね、いつかやりませんか？」

律「そうだな！」

5話 会話2-2

軽音部の復帰を約束したところでまた一つ疑問
そうあれほど前髪を下ろさなかった律先輩がカチューシャを取って
いるのである

漣先輩に言われたのだろうか、意外と可愛い

梓「律先輩」

律「ん？なんだ梓」

梓「カチューシャ取ったんですね、似合ってますよ」

律「そうか？漣に言われて外してみたんだけど」

唯「律ちゃん可愛いよ」

漣「ほら私の言った通り」

確かに律先輩は可愛い、でもちよっと人が変わりすぎた気もする

唯「漣ちゃんは髪型変えたりしないの？」

漣「え、私は別に」

律「そうだなー、漣の髪型も変えてみようか」

漣「なんで律が決めてるんだよ」

律「いいじゃん漣だって私の髪型決めたじゃん」

漣「くっ」

唯「そうだよ！漣ちゃんの新しい髪型楽しみだよ」

漣「そうか？じゃあ変えてみても・・・」

律「よし、じゃあ今度の日曜漣のイメチェン会な！」

梓「は、はあ」

見た目は変わっても、心は変わってない

そついう律先輩に少し安心した

6話 外出

唯「ねえ律ちゃん、漣ちゃんの髪型どうする？」

律「うーんそうだな・・・、いつきにバツサリいっちゃうかー！」
ガツン

律「ついってー」

漣「私をどうする気だ」

律「どうって、別に決め手ないしー」

漣「じゃあ無理にする必要ないだろ」

律「だってさあ、漣だって『律は前髪下げた方が可愛いって』とか言っただじゃん」

漣「それはまあ、そうなんだけどさあ、でもやっぱり嫌！」

律「それじゃーどうしようか」

梓「そこまで無理にしなくてもいいと思いますけど・・・」

唯「そうだよ、漣ちゃんが可哀そうだよ」

律「唯まで言うか・・・よしいいこと考えた！」

唯「何々？」

律「漣を梓みたいになツインテールにしてみるとか」

梓「私みたいにですか？」

律「梓、髪留めある？」

梓「ありますけど、本当にやるんですか？」

律「ヤルに決まってるだろ」

梓「は、はあ」

自身有り気な顔と悪戯な微笑みで漣先輩の髪を器用に止めていく
律先輩が髪を止めてる所なんて見たことなかったのにかなり手際が
良い

律「完成つと、前向いて」

唯「うお！あずにゃんが二人！」

漣「どう、かな」

律「んー微妙」

漣「おい！」

律「なんか漣って感じがしないなあ」

唯「みおにゃんおいでー」

梓「なんでもにゃんつければいい話じゃないです」

さわ子「あら、みおにゃんにだつてなれるのよ？」

梓「さわ子先生！？いきなり話しかけないでください、っていつからいたんですか？」

さわ子「随分前からいたわよ、梓ちゃん胸大きくなつたわね」

梓「な、何言ってるんですか」

律「さわちゃんはと思う？」

さわ子「うーん、やっぱりネコミミを付けてみないと分からないわね・・・」

漣「先生ちよつといきな」

さわ子「あべこべ言わず付けるのよ！」

漣「うつ・・・」

唯「おお！みおにゃんの完成だね！」

律「なかなかいいんじゃないか？」

梓「なんかもう見れませんか・・・」

さわ子「何年たつても私の目に狂いは生じないわね」

漣「オヨメニ、イケナイ」

律「おーい漣、戻ってこい」

漣「オヨメニイケナイオヨメニイケナイオヨメニイケナイ・・・」

律「完全に壊れたな」

梓「なんで先生がネコミミなんて持ち歩いてるんですか・・・？」

さわ子「新しい一年生にネコミミ会っ子探してたのよ」

唯「どうして？」

さわ子「梓ちゃん以来軽音部はネコミミというのが流行っちゃって、今部員を集めてるところなの」

梓「とほほ・・・」

律「集めてるつてもしかして今部員少ないとか・・・？」

さわ子「そうなのよ、去年は結構賑わってたみたいんだけど、あなたたちと同じね」

先輩たちが経験してきた何もない状態の軽音部

私は憂と純の協力もあり継続させることができたけどその後すぐ仕事に着いたから事情が把握できていない

純とも会ってないしトンちゃんの行くへも気になる

唯「でもさわちゃん先生だけじゃもしかして・・・」

さわ子「そう、誰もいないから他の先生にも頼んでるけど、人手が少ないの」

律「さわちゃん」

さわ子「どうしたの？」

律「私たちで手伝えることってない？」

7話 募集1-2

さわ子「手伝うことってあなた達部員集めする気じゃないでしょうね？」

律「あつたりー」

さわ子「はあ、気持ち嬉しいんだけどあなた達仕事あるでしょ？」

律「平気平気！昼間は休み多いし、な、漣」

漣「夕方から仕事だから放課後は結構ギリギリだけど何とかかなりそう」

梓「じゃあ、私も手伝います、一応卒業生ですし」

唯「あずにゃんもやるの？じゃあ私もー」

律「じゃあ後はムギだけだな」

唯「ムギちゃんも手伝ってくれるかな？」

律「大丈夫だってー」

漣「じゃあ全員揃ったな」

唯「軽音楽部復活！」

梓「ですね」

律「せーの…」

全員「おー！」

さわ子「よし頑張ってあなた達の衣装作っちゃうわよー」

漣・梓「えっ」

漣「ってことは…」

さわ子「勿論みんなメイドさんよ？」

漣「嫌だ」

さわ子「あら、あなた達が新歓ライブでないなら誰がライブするの？」

梓「別に衣装なんて必要ありませんよ！私服で大丈夫です」

さわ子「だめよ、軽音楽部はステージ衣装が好評なのよ」

梓「それって不味くないですか？」

さわ子「大丈夫、私の目に狂いはないわ！」
漣・梓「トホホ」

8話 募集2-2

唯「新歓ライブいつなの？」

漣「そういえば聞いてなかったな」

さわ子「ちょうど1か月後よ」

律「1か月か」

梓「仕事もありますし都合が取れないこともあるので、大丈夫でしょうか？」

漣「少しきついかもしれないな」

律「できることはやってみよう」

唯「またギー太と演奏できるのかあ」

梓「ギターメンテナンスとかしてますか？」

唯「勿論、大事にしてるよー」

梓「本当に大丈夫ですかね？」

唯「む、私にだってギー太のメンテナンスぐらいできるもん」

以前まではギターのメンテナンスのベクトルを間違えていた人

更にメンテナンスにお金がかかるということも知らなかったのにな
となつてはすべて一人でできるというのはやはり成長の証だろうか
律「じゃあ個人でしっかり練習な」

漣「都合が合う日があったらムギにも連絡して合わせるからよろしくな」

梓「はい、よろしくです」

そう言い手を振る先輩二人にお辞儀する

隣の唯先輩もしばらく手を振っていたが突然こっちを向き真剣な眼差しを浴びせてくる

梓「どうしたんですか・・・？」

唯「あずにゃん」

梓「はい・・・」

唯「コード教えて」

梓「そんなことだろうと思いましたがよ・・・」
やはり忘れていたか唯先輩

だがこれはまだ予想内なので心配はない
ただ、ギターの調子だけは妙に気になった

9話 約束 (Side)

「秋山ー」と呼ばれ振り返る

だいぶ馴染んだ職場は今日も賑わっていた

飲食店で働くなんて数年前の自分では予想もしなかっただろう、でも両親の知り合いがこの店を経営していると聞き、勧められたのだった最初は嫌だった、人の目につくことは小さい頃から嫌いだった

まして飲食店なんて接客業、自分には到底できないだろうと思っていた

でも

いつだって一緒だった、私が作文を書いてそれが認められ全校生徒の前で発表することとなった時、嫌になっていた自分の苦手を少し克服できたのだった

今だって、律は応援してくれた、一緒に働いてくれた

人見知りはなかなか治らないけどだいぶ軽くはなつたと自分でもわかる程だった

漣「律」

律「ん？」

漣「ライブ出るって言っちゃったけど、この後大丈夫なのか？」

律「どうだろう、みんな忙しいしなあ」

漣「ムギに言っておかなくて大丈夫か？」

律「あ、そうだった」

ポケットから携帯電話を取りだしピポパとボタンを押す

耳に当てて数秒後、律が口を開く

律「あ、ムギ？今大丈夫？」

確認を取りまた電話を進めている

律「今度さあ、学校でライブやることになっちゃって、そう新歓ライブ」

「ちょうど一か月後なんだけど時間取れない？」

「本当？じゃあさわちゃんに言っておくから、ありがとう」

漣「いいって？」

律「うん、今度の休暇でこっち来てくれるって」

漣「久々にみんなで演奏かぁ」

実に数年ぶりだろうか、また放課後ティータイムが再結成されるのだ

漣「また練習頑張らないとな」

律「おー」

10話 約束 (唯side)

「あずにゃん」

可愛い後輩のニックネームを呼ぶ
すると隣で、「はい」と返事をする

それがなんだか楽しくてつい、用もないのに呼んでしまう

唯「なんでもないよ」

梓「じゃあ何で呼んだんですか・・・」

唯「なんとなくだよ、なんとなく」

梓「は、はあ」

唯「むふふ楽しみななあ」

梓「何がです？」

唯「ギー太をまたたくさん弾けるなんて」

梓「メンテナンスしてるんですか？」

唯「してるよ！」フンス

最近メンテナンスなんていつやっただろうか

添い寝したりはするけどどうもメンテナンスだけは苦手で弦が切られる所を見ると何故か少し不安になる

唯「あの、あずにゃん」

梓「なんです？」

唯「メンテナンスキット貸してください・・・」

梓「だと思いました、明日持っていくので待っていてください」

唯「ありがとーあずにゃん」

いつも頼りになる後輩のあずにゃんと、妹の憂
自分は何んて幸せ者なんだろう

唯「お！あずにゃんたい焼きだよ！」

梓「食べましょう！」

11話 帰宅（濡side）

律「疲れたー」

と背伸びしながら言う律

私も小さな欠伸を一つ、店の非常灯がぼやけて見える

ロッカーの中にある鞆から携帯電話を取りだし時間を見る

12：56分、ディスプレイにはそう映し出されていた

何故遅くなったかと言うとこの店の常連さんの会社の貸切で飲み会だったのだ

いつもなら11時には店を閉めて退社しているのだが今日は店長から残業をしてくれ、と声がかかったのだ

濡「律、帰るぞ」

律「ん、わかった」

着替えを終え更衣室の電気を消しドアを閉める

「田井中、秋山」

私達を呼んでいる声の正体はこの店の店長、佐々木友一だった

律「お疲れ様です」

佐々木「悪いねえ、常連さんだから断りきれなくて」

律「全然大丈夫ですよ」

この店長、何故か私達にもペコペコしている

職業病か単なる癖なのか

律「じゃあ、お先です」

佐々木「うん、お疲れ」

濡「失礼します」

店長につられ深々とお辞儀をすると裏口から外へ出た

律「あー、寒い寒い」

3月の夜の空気はまだ冷たい

濡「どうする？バスもうないんじゃないか？」

律「うーん、仕方ない歩くか」

さっきまで寒いと言ってたのに歩くとはまた変わっている
タクシーくらいすぐ呼べるだろうに

マフラーをぐるぐるに巻きコートに手をつ込んで歩く

漣「もうすぐ4月なのに寒いな」

律「地球は温暖化してるって言っのになあ」

そんなどうでもいいことを話しながら、人気のない道を進む
律「そっか、もう4月か」

漣「何かあるのか？」

律「卒業してから何年経つのかなって」
漣「そっいえばそうだな」

12話 帰国2 - 1 (紬side)

紬「疲れたー」

思いつきり背伸びをし外の空気を吸う

季節が季節とあつて空港に人は少ない

客待ちのタクシーが数台、列を成して一列に並んでいた

何気なく先頭のタクシーを選びドアを開ける

紬「桜ヶ丘高校までお願いします」

運転手「桜ヶ丘？えっと・・・」

年期の入ったしわしわの手で地図を広げる

運転手「お待たせしました、桜ヶ丘高校って女子校でしたよね？」

紬「はい」

運転手「わかりました」

白い手袋をし車は出発する

体を倒すと椅子が体を受け止めてくれる

飛行機と違って静かな車内は眠気を誘う

飛行機の中では隣の子供がうるさくて眠れたものじゃない

更に仕事の疲れもあつてか眠気は勢いを増す

空港から桜ヶ丘高校は遠い、しばらく寝ていてもいいかなと思いい目を瞑った

13話 帰国2 - 2

「お客さん、お客さん」

運転手の先ほど聞いた声がする

目を擦って外を見てみるとうす暗く、空は紫色一色だった

目線を運転席へ戻すと運転手と目が合う

紬「あ、運賃ね」

財布を取りだしお札を数枚取り出す

運転手「ありがとうございます」

横のドアが自動で開き外へ出る

また寒い

暖房が効いた車内とは打って変わって寒い外は春の訪れを感じさせないようにもとれた

タクシーが通りすぎるとどこか遠くで子供の声がしたような気がした
近くには懐かしい桜ヶ丘女子高等学校と書かれた看板がある

校内にある桜の木には何も無い

正面の門へ向かい改めて正面から見てみる

懐かしい

すると音楽室の明かりが点いていることに気付く

もうすでに練習が始まっているのだろうか

いつかの胸のわくわく感と共に校舎へ入る

さわ子「ムギちゃんね？みんな待ってるわよ」

紬「お久しぶりです、さわ子先生」

さわ子「久しぶりね、寒いでしょう？入って来て」

下足箱を通り校舎へ入る

多少内装が変わっているものの卒業当時と何ら変わりなかった

さわ子先生の後を一緒に進み階段を昇る

3年の教室の廊下を過ぎ音楽室へ近づく

明かりは点いているのに楽器の音はない

また懐かしい匂いが、外にまで漂っていた

14話 5人（細side）

ギギギギ・・・

木製のドア特性のきしむ音が音楽室に響く

どうせさわちゃんが今度の新歓ライブ衣装でも作って見せびらかしに来たのだろう

全く懲りない先生である

ただ少し今度着る衣装が気になってしまってもいいふりをしドアに視線を移す

律「ムギ！」

そこに立っていたのは綺麗な金色の髪の子、紛れもなくムギ本人だった

自分の歓声にムギの存在を気付いたのか3人も次々と視線が移る

梓「ムギ先輩！」

唯「ムギちゃん！」

漣「ムギじゃないか！」

それぞれ帰国したムギを歓声と共に迎えた

細「お久しぶりね」

寒そうに入ってきたムギに梓が紅茶を出そうと席を立つ

梓「ムギ先輩は何がいいですか？」

細「そうね、ミルクティーがいいかしら」

やはり寒い日にはミルクティーなんだろう

実際、机に置いてある4つのティーカップには全てミルクティーが注がれており美味しそうに湯気を立てていた

ムギが定位置に着きまたお茶会が始まる

律「今帰ってきたのか？」

細「ええ、さっきタクシーで着いた所よ」

漣「忙しいのにごめんな、今度新歓ライブがあってムギの力が必要なんだ」

唯「ムギちゃんのキーボードまた聞けるんだよ！」

そんな話に華を咲かせていると梓がミルクティーを持ってくる

梓「お待たせしました」

紬「ありがとう梓ちゃん」

梓も席に戻りまた話が進む

唯がコードを忘れてしまったこと、それでもおやつ目当てにまた特訓中だということ、親と外国から国内への仕事へ移したいと交渉中だということ、澪がまたダイエットを始めたということ、梓が彼氏ができないという愚痴を聞いていた

さわ子「みんなー衣装できたわよー！」

話を中断したのは意気揚々と扉を開けた元私達の教師であつたさわ子先生、通称さわちゃんであつた

唯「どれどれ」

唯だけは興味津々であつたが逆に唯以外はどうでもいいと言わんばかりにミルクティーをすすった

さわ子「今回は王道のメイド服のスカートをミニスカートにしてみたの！」

唯「さわちゃん着てもいい？」

さわ子「もちろんよー」

何か2人で賑やかにしていたが私達4人は何事もなかったようにデイトimeを続ける

3分後・・・

唯「どうかな？」

さわ子「いいわいいわよ、私の目に狂いはないもの」

不意に目を2人の方向へ向ける

律「うおっ眩しい！」

進化した唯は自分のデコより光っていたことだろう

律「ってこんなのを着るのかよ・・・私達一応大人だぞ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486v/>

Double Steppe

2011年11月5日23時16分発行